



外遊びが豊かにするものは？

酒井忠喜

今回の特集に関連して東京の小学校では、校庭に雪が積もった時、グラウンドコンディションを維持するために、雪遊びをしない学校もめずらしくないことや放課後、子どもの安全や責任の在り方の観点から、子どもが自由に校庭遊びができない実情を知った中・高校の教員が非常にショックを受けていた。外での遊びは限られ、どこにでもあるような家の近くの公園では、キャッチボールやボール蹴り遊び禁止の看板が立ち、遊びの中身も限定されている。さらに、塾や習い事の影響もあり、遊ぶ時間も仲間も減少してきている。学校から帰った後の外遊びの現状でさえ、ますますやせ細っている。こうした事情は、土曜日曜の休日でも、大きくは変わらない。休日における外での活動でさえ、習い事として行われている「野球」や「サッカー」などのスポーツが主流で、子ども自らが独自のルールを決めたり、主体的に活動を決めたりできる「外遊び」は瀕死の状態だ。

その一方、屋内での遊びは携帯型端末ゲームを中心とし遊びが盛んで、学校から帰

宅後大人数で遊ぶことがなくなってから久しくたつ。気がついてみれば、成人した大人達も携帯型端末ゲームに興じる姿を電車内で見かけることも珍しい光景ではなくなった。

「外遊び」の喪失は、子どもの発達の上で、身体能力の低下をもたらすだけに止まらない。友達とうまくかかわることができないことも、「外遊び」の喪失と大きくかわりがありそうだ。また、人を思いやる「共感」する力も遊びの中で培われる力ではないだろうか。

今月の特集では「外遊び」すなわち「野外体験」に含まれる豊かさに早い段階から着目し地道な取り組みを行っている NPO をはじめ、学校遊びクラブの取り組みなど学校内にとどまらない実践を集めることができた。

私たちの取り組む学校体育も、「外遊び」という観点から見直すことで、またあらたな実践が生まれてくることを期待したい。

(さかい ただよし／編集部)